

ゆずりは通信

第23号 平成25年4月20日(隔月発行)

発行：ゆずりはの会事務局

電話：0565-35-7182

Eメール：takekaki@hm8.aitai.ne.jp

ホームページ：

<http://www.hm9.aitai.ne.jp/~warabino/>

平成25年2月定例会のメモ

- * 2月12日(火)午後7時～ * 福祉センター 34 会議室
- * 会員13名が出席、他に、浦川、神田さんが参加

「もしもノート」をもう一度振り返ってみて、感じたことをそれぞれ持ち寄ることで話し合いを持ちました。加藤さんが作成して、実施、まとめてくださったアンケート結果をテキスト代わりに使い、各人が興味を持ったテーマを発表してゆきました。

* ホスピス

ホスピスにはいくら費用が掛かるかについて、額田さんが調べてくださいました。

3月の会で紹介する予定です。

- * 延命治療 ⇒ 本人の希望と家族の想い
- * 健康と病気
- * 葬式と墓 ⇒ 散骨、薄葬
- * 今後の生活 ⇒ 生活費や年金
- * 人生設計 ⇒ 楽しむ、ボランティア、地域貢献、社会貢献、新事業
- * 死ぬことは、何とかなる

ゆずりはの会 平成25年3月

3月12日(火) 午後7時～ 福祉センター 34会議室 11名の参加
お墓について、各人から、その人の場合について、説明があり、話し合いました。

ゆずりはの会 4月定例会

4月9日(火) 午後7時～ 福祉センター 34会議室 先生を含め29名が参加
講師：菅沼幸夫医師

- * 医療の立場から、地域の人を見守ってくださいましたし、今も現役です。その経験から人の生き方について、先生が思う所をお話してくださいました。
- * 高橋町の菅沼医院の大先生です。平成22年12月に、ゆずりはの会で講演いただいた菅沼正司先生のお父上です。
- * 講演の依頼は、河野悠子さんに御世話頂きました。

菅沼先生が準備くださったレジメ

「健康」には振り回されず「死」にはさからわず

この頃は「若さ」「美しさ」「健康」が話題になっています。又、「死に方」にも多くの意見があり、平穩死が難しくなってきました。今回は歴史をふまえて過去、現在、これからの医療と介護を考えたいと思います。

平均寿命：昭和初期 40 歳、昭和 20 年 50 歳、現在男 80 歳 女 86 歳

1. 感染症が主だった時代

結核・梅毒・疫痢・赤痢、肺結核は国民病として恐れられていて死亡率は一位。若くして人々が亡くなっていた。樋口一葉 28 歳 正岡子規 35 才 宮沢賢治 37 歳(雨にも負けず・・・)石川啄木 45 歳(極貧のうちに死す)竹下夢二 50 歳
夏目漱石 50 歳(最後はうつ病？修善寺の大咯血後6ヶ月 弟は 28 歳で、結核で死亡)
徳富蘆花の「ホトギス」の武雄と浪子 20 歳の死

2. 平成 5 年(1992) スペイン・バルセロナでオリンピック開催。

参加人数 1 万 5 千人 (エイズ発症)
コロンブスのアメリカ大陸発見後 500 年(梅毒スピロヘータ)
500 年前といい、現代といい、スペイン・バルセロナは性愛病に縁の深い都市である。新大陸発見の栄光の陰に咲く「エイズ」。歴史の裏側にはいつも黒々とした花が咲く。

3. 病室という部屋(在宅ケアの原型)

志賀直哉の「暗夜行路」昭和 12 年完成。
病室には酸素とカンフルの匂いが漂っていて、その匂いが鼻をついた。その日その日の医者
の診察が待たれる。病室は普通の家の一部屋を指している。患者さんに「寄り添っての看護」
明治時代の子供の死亡率:100 人中 15 人 いまでは 100 人中 0.5 人。当時は結核を始め、急性肺炎などの急性疾患が多く、症状は主に発熱。
治療は頭を冷やす、身体を冷やす。当時は氷代が高価でした。

4. 看病する男達

宮沢賢治は、大正 11 年に最愛の妹を肺結核で亡くす。(24 歳)看取ったのは賢治である。
当時の肺結核の療法としては、病人の周りを「屏風」で囲い、「蚊帳」をつつて暗くし、朝に夕に、
賢治が看病した。封建的で男尊女卑と言われた一昔前にも、男達が家族の世話をしていた時代
があった。兄が妹を、弟が兄を、父親が息子を、夫が妻を、女にも及ばない行き届いた看病
をしていた。今では病人の看病は、母親や妻、娘や嫁、つまり女の役割が当然とみなされてい
る。

泊りこみの看護婦・・・寺田寅彦は自分を看病した飯田のぶ子に感謝の気持ちを書き残してい
る。一人の看護婦に誠心誠意看取られて、自宅での死は、最高でなくても最善でしたでしょう。

5.「ばあや」というヘルパー 在宅医療の原型

日本の普通の家庭では「ねえや」「ばあや」「女中」といわれた老女が家族の一員のように暮らしていた。子供の教育の多くは「ばあや」「ねえや」の仕事でした。夏目漱石の「ぼっちゃん」の「きよ」 谷崎淳一郎、三島由紀夫も「ばあや」に育てられた。北杜夫の「ばあやの思い出」―僕が安心できたのは「ばあや」のおかげだった。彼女は僕が小学校に行くようになってからもまだ傍に寝てくれた。

6. 抗生物質の開発、抗菌剤の導入

昭和20年敗戦によりペニシリン、ストマイ、パス、アイナーの抗生剤、抗菌剤の導入により結核、梅毒、感染症等の治療が改善され、治るようになった。

7. 生活習慣病・ガン・うつ病・認知症・精神疾患の時代

昭和30年頃 農業から工業化へ、そしてバブル時代に突入すると、病の形態も変り、対応する医療、看護も変化してきた。

家庭生活の核家族化。在宅医療から病院医療へ。一億中流時代。

昭和36年頃から癌が死亡率の第1位に。「がん闘病記」が多くなる。

8. 「生活習慣病」(成人病)

肺病、コレラ、梅毒、感染症などに代って 癌、エイズ、高血圧、肥満、高脂血症、糖尿病等の生活習慣病へと移行する。

9. 老化と病気の区別

今日の日本人の大人の病気の多くは「癌」を始め、生活習慣病(老化現象)です。

しかし、「老い」を回避しようとするあまり「若さ」「美しさ」「健康」を追い求め、振り回されているのが現状です。

10 健康のためなら命はいらない。サプリの氾濫。

(例1)「老い」を忌避するあまり「若さ」「美しさ」「健康」を追い求め、振り回されている現状です。病院の梯子もそうです。テレビや本屋で「健康」「いつまでも美しく」があふれています。歳をとれば減少するといわれているコンドロイチン、ヒアルロン酸、グルコサミン、コラーゲンなどは、摂取しても体内に吸収する段階で分解されてしまい、効果があるとは思えません。しかしよく売れているようです。私は全部否定するつもりはありませんが「鰯の頭も信心から」という言葉もありますから、信頼して使用して下さい。

(例2)朝一番に採れた自分の新鮮尿を飲む。これも調子が良いと言ってみえる人もいました。今の日本人は身体に良いと聞けば小便すら飲んでしまう。まさに「健康のためなら命はいらない」・・・ただ、これほど年寄りが眼の色を変えるのは、「周囲に迷惑をかけないように健やかに老いろ！」という圧力の物凄さを示しているのかも知れません。

11. 現代医療の問題点・・・時代の発展と共に「いじめ」自律神経失調症、

鬱病、認知症、等の社会生活に関係する病がみられる。

12. つくられる「死」、平穏な「死」

「死」に関して、脳死、呼吸死の判別が困難な時代。

「つくられた命、臓器移植」 脳死か呼吸死か。

「生きている臓器が欲しくて脳死という死をつくる人間怖し」

(平成 22 年3・1朝日新聞の歌壇に選ばれた歌)

参考文献 「臨死のまなざし」 立川昭二